

平成15年度「インターンシップ」授業における学生支援  
—本学人間科学部人間健康科学科における事例研究—

殿谷成子\*

**The Support for students in an “Internship” class in 2003  
—A Case study in the Department of Human Health  
Science of Osaka International University—**

Shigeko Tonoya\*

**Abstract**

In charge of an internship class in 2003, the author talked with the students, finding that they felt uneasy about how to work.

This study explores how best to support students, showing that they need careful support. There should be people available for students to consult with whenever they need to. It is important to keep in touch with students, believing in their personal growth.

**キーワード**

インターンシップ 学生 実態 対話 支援

**I はじめに**

インターンシップとは、学生が在学中に企業などで一定期間就業体験を行う教育制度のことである。平成9年に、当時の文部省・労働省・通商産業省の3省が「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」を示してから、インターンシップ制度は徐々に拡がり、最近では、大学が単位認定を行い独自に行うもの、受入れ企業が独自に行うものなど様々な形態のインターンシップが出てきている。近年、若者のフリーター志向や短期離職者の増加が社会問題となっており、在学中から職業人として必要な基礎能力やキャリア形成力を養い、働く意識を確立させる教育の重要性が叫ばれている。その原因の一つは若者たちの職業意識の希薄化や多様化であると言われている。

平成15年11月の新聞で、文部科学省の調査によると、平成14年度の「インターンシップ」を体験した大学生が初めて3万人を超えたと報告する記事があった。本学では平成14年度まで「企業研修」としてそれぞれの学科で実施してきたが、平成15年度から学部内共通科

\*とのや しげこ：大阪国際大学人間科学部講師〈2004.6.29受理〉

目「インターンシップ」の授業として実施することとなった。授業修了者には2単位が認定される。また、本学と大学コンソーシアム京都のインターンシップ事業との連携により、大学コンソーシアム京都のインターンシップにも応募できることになった。大学コンソーシアム京都のインターンシッププログラムに参加した学生には、学内の「インターンシップ」2単位として読み替え、認定されることになった。

筆者は人間健康科学科において平成15年度の「インターンシップ」の授業担当者となり、「インターンシップ」を履修した学生との面談や学生からの相談を通じて、学生の揺れ動く内面に触れる機会を得た。学生を社会に送り出す立場の者として、学生は社会に出ることに関してどのような気持ちを持っているのか、どのような支援を必要としているのか、学生の実態を把握することが今後の本学の教育に役立つと考える。今回の「インターンシップ」授業の展開、学生の実態、学生との対話、筆者が感じたことを記録し、インターンシップ授業における学生支援のあり方を検討することを目的とする。

## II 学生の実態と支援

### 1. 大学コンソーシアム京都インターンシッププログラムへの参加支援

財団法人大学コンソーシアム京都は京都地域の50の国公私立大学・短期大学、京都市、京都商工会議所をはじめとする経済4団体が構成される組織である。1998年度から、全国に先駆け、インターンシップ事業に積極的に取り組んでいる。「ビジネス」、「行政」、「NPO」、「ベンチャー」のインターンシップコースがあり、充実したプログラムが組まれている。受講の申込み時に提出する出願票には「インターンシップ実習にあたっての動機や意欲、またその成果を自分の将来との関係でどのようにいかしていきたいのかまとめてください」の志望理由を記入することが求められている。また、出願の際にインターンシップに臨む心構えなど5分程度の面接が行われる。出願した学生のうち、受講が許可される（合格する）のは約6割である。また、「合格後の辞退は一切認めません」とされている。平成15年度の出願期間は5月9日（金）と10日（土）であった。

人間健康科学科からは3名が応募し、1名が合格、事前学習→実習→事後学習のプログラムを終了し、本学の授業単位も認定された。あとの2名は不合格であった。2回生のセミナー担当者に前年度の募集ガイドを渡し、2回生時1月のセミナー授業で学生に紹介してもらえるようお願いしていた。その時、筆者のセミナーでは、興味を示した学生が数名いた。また、4月以降、学内の進路・就職部に募集ガイドを取りに行った学生が22名あった。大学コンソーシアム京都の研修先に魅力を感じながらも、実際に出願した学生が少ないのは、興味があっても、出願には至らない学生がいると考えられる。その理由には次のような内容があるだろう。まず、第一に800字程度の志望動機を書く必要がある、事前研修に毎回無遅刻無欠席で出席しなければならない、事前研修に京都に通うための交通費がかかる、などである。参加したいという気持ちがあっても、やらなければならない事柄に行動する前から躊躇し、一つ一つの事柄を実行していくことにじゃまくささや、やり遂げる力の不足を感じ、尻込みしているのではないかと思われる。筆者には何としてでも物事を達成しようと努力する姿勢が不足しているのではないかと感じられた。

応募した3名のうち2名は学生自身が自ら書類を作成し、応募手続きを済ませていたので、応募していたことを知らされたのは、本学の進路・就職部に大学コンソーシアム京都から連絡が入った後のことであった。このうちの1名が合格した学生である。不合格であったもう1名の学生には、出願するまでの相談に応じたので、その様子を記録する。

〈事例 学生Mの場合〉

Mは本学の実習先に希望する業種がないため、オリエンテーション時に大学コンソーシアム京都の説明に参加していた学生である。筆者がMに廊下で会った際、声をかけて、「京都の方、応募する？」と聞いたところ、「応募しようかどうか、迷っています」という返事だった。出願しても合格しそうでないと引っ込み思案をしている様子である。そこで、「頑張ってみたら」と励ましたところ、「一度考えてみます」という返事があり、連休前に別れたままであった。5月9、10日の出願日を控えた連休中の5月3日に筆者の自宅に電話があり、応募を決意した連絡があった。そして出願票に書く志望理由について、「書くことが苦手なので文章作成に協力してほしい」との申し出があった。5月6日に研究室で会う約束をし、Mが下書きを持って来室することになった。Mの下書きを元に話し合い、さらに良い文章になるよう相談をした。Mは既に希望する実習先についてホームページで実習先の仕事内容を調べていた。参加できる人数は1名か、2名である。Mの参加したい気持ちは強いが、相手に伝わる内容が文章に表れていない。話していくと、M自身の考えが言葉になり、書き直してみることになった。再度5月8日に会い、文章を作成、さらに文章指導に経験の深いセミナー担任の教員にも添削をお願いし、提出する運びとなった。京都駅近くにある大学コンソーシアム京都に出願票を提出後、筆者の所へ提出の際に行われた面接の様子を報告に来た。たくさんの学生が出願に来ていて圧倒されたこと、面接で自分のしたいことが十分に言えなかったこと、インターンシップ実習生募集ガイドに「実習中の茶髪や金髪は禁止です」と記載されているため、「髪が茶色だけれど、もし合格になったらどうするのですか」と言及されたことなどを語り、他大学学生のインターンシップに取り組む意気込みの強さ、自分の姿勢の甘さ、準備不足などを肌で感じてきた様子が伺えた。5月30日の選考結果は否であったが、「自分のやりたいことがよくわかったので、必ず就職できるよう頑張っていこうと思う」と報告に来た。大学コンソーシアム京都のインターンシップ出願をきっかけにMの社会に出て働く意志が明確になり、今後の大学生活において就職を目指して準備していくことの大切さを自覚したようであった。

大学コンソーシアム京都のインターンシップが不合格であった場合、本学が受入れをお願いしている実習先でインターンシップに参加するかどうかを学生に尋ねることにしていたので、不合格になった2名について、本学での参加を希望するかどうかを聞いたところ、希望しないという返事であった。本学の主な実習先であるフィットネスや社会福祉関係ではなく、自分の希望する業種がある一般企業でのインターンシップ実習を強く望んでいることが伺えた。実習先について、学生の多様な希望を叶えるために、大学コンソーシアム京都のような外部組織での研修を積極的に勧めていくことが良いだろう。

今後、大学コンソーシアム京都インターンシップに参加させるための学生支援には、2回生時に大学コンソーシアム京都インターンシッププログラムの情報を知らせ、学生に準

国際研究論叢

備を促すこと、過去に参加した学生の報告を2回生以下の学生に伝えること、参加したいという学生を励まし、きめの細かい支援をすること、が有効であると考えられる。

2. 本学のインターンシップ

平成14年度まで課外講座「企業研修」として実施し、人間健康科学科では学科として持っている研修先は数箇所、研修への参加者が5・6名程度であった。平成15年度は人間科学部4学科の学部内共通科目となったため、人間健康科学科の学生にとって実習先が広がり、16箇所の実習先に18名の学生が参加した。

(1) 授業の展開

「インターンシップ」を授業として展開するため、平成14年度までとは異なり、実習に送り出すまでの教育を充実させるよう、事前・事後の学習を実施した。授業のスケジュールは表-1のとおりである。

表-1. 本学インターンシップ授業スケジュール

月/日(曜)	時間(提出期限)	場所(提出先)	内 容	備 考
4/22(火)	8:00-19:30	5-201	オリエンテーション スケジュールの説明	
4/23(水)	16:20-17:50	5-101	事前研修① 就職活動準備講座 職業観 の確立「働くことの意義」 を受講する。	この講座を聞いてレポート (800字程度A4版1枚)にま とめる。
4/25(金)	17:00まで	学部事務室	4/23事前研修①のレポート 提出エントリーシート提出	
5/9(金)	17:00まで	学部事務室	小論文「なぜインターンシ ップに参加するのか」提出。	インターンシップ実習にあた っての動機や意欲をまとめ る。(800字程度A4版1枚)
5月	随時		面接・実習先調整	日程・場所は各学科の掲示 板にて知らせる。
6/10(火)	18:00-19:30	5-201	事前研修②「ビジネスコミュ ニケーションの基本」エンカ レッジセンター東田晋三先生	この講座を聞いてレポート (800字程度A4版1枚)にま とめる。
6/13(金)	17:00まで	学部事務室	6/10事前研修②のレポート 提出「個人登録用紙」提出	
6月中旬		学部掲示板	実習先発表	
6月中旬		学部事務室	申込み金納付(1万円)	日程は学部掲示板にて知ら せる。
6/24(火)	18:00-19:30	5-201	事前研修③「現場実習について」 世戸俊男 事前研修④「日誌の書き方」 殿谷成子	
実習前	随時		実習先訪問	各自で研修先にアポイント をとり、訪問する。
現場実習	夏期あるいは 春期		各実習先で約2週間実習を 行う	授業担当者および学科教員 が研修先を訪問する。
実習後	随時	学部事務室	日誌・レポート提出	
1/23(金)	10:40-12:10	5-202	事後研修①報告会	各学科から2名および大学 コンソーシアム京都に参加 した3名の計11名が報告。

## (2) 履修状況

学年当初の教務課に届け出た「インターンシップ」授業の履修者は39名である。そのうち3名は大学コンソーシアム京都のインターンシップに出願した。本学のインターンシップを希望した36名のうち実際に実習に参加したのは18名である。途中で辞退した学生は18名である。「インターンシップ」授業は他の授業と異なり、学外の実習先と繋がりのある科目である。「インターンシップ」授業の実施については、学生の実習先を確保するため、既に学外の企業や団体に実習受入れの依頼を済ませている。受入れを承諾してくれた先にはできるだけ学生を送りたいと考える。特に、実習先に実習に行く学生の人数をお願いしてから断りは実習先と本学との信頼関係を裏切ることになるため、学生の辞退を最小限に食い止めたいと神経を使う。履修登録しておきながら、半数の学生が辞退している結果から学生の実態を考えると、学生にはそのような相手先のある授業だという意識が薄いと感じられる。

## (3) 途中辞退の理由

表-2はインターンシップ履修者のうち途中辞退した18名について、辞退の時期、辞退に至った内容、人数を示したものである。

表-2. 途中辞退者

時期	辞退に至った内容	人数
4/22	オリエンテーションを欠席	7名
4/23	事前研修①を欠席	3名
4/25	事前研修①のレポートを未提出	2名
5/9	小論文を未提出	2名
実習先調整の面談以後	個人的理由	4名

「オリエンテーションを欠席」による辞退者7名については、実際に実習に参加するかどうかの意志ははっきりしないが「インターンシップ」授業を一応履修だけしておこうと考えた学生だろうと思われる。「事前研修①を欠席」、「事前研修①のレポートを未提出」、「小論文を未提出」による辞退者7名には事前研修出席や提出物をこなすことができなかった、あるいは途中であきらめた様子が読み取れる。実習先調整のための面談以後に実習を辞退した学生が4名いた。そのうち2名の学生の辞退した理由は聞いていないが、実習先調整の面談をした後、まだ学生の意志がはっきりしないため実習先が決まらず、2回目の面談を実施する約束をしたが、2回目の面談をするまでに辞退を申し出てきた。たぶん個人的な理由があったのだろう。あとの2名は運動クラブ所属学生であり、夏休みは試合と重なるため、春休み中に実習できるよう調整していくことを面談で本人に確認していたが、辞退を申し出てきた。理由は春にインターンシップ実習2週間に行くことによって、3年生時の2,3月から始まる会社説明会や企業セミナーに参加することができなくなり、就職活動に遅れが生じると危惧したことであった。2名は同じクラブであり、まず一人が辞退し、次にもう一人も辞退するという連鎖反動的な辞退の仕方であった。

「インターンシップ」授業を辞退した学生の多さから学生の実態を考えると、自分の将来について大学卒業までの1,2年程度の先を見通して考える力の不足と計画性のなさ、また「インターンシップ」授業に臨む気持ちの甘さが感じとれる。辞退に至る理由にはそれぞれ個人による違いはあるが、「インターンシップ」授業を履修し、授業の一つ一つの手続きをすることにより、学生の頭の中で就職活動に関する意識がより鮮明に具体的になっていたものと考えられる。行動することによって学ぶことの大切さを感じた。今回、「インターンシップ」授業を途中で辞退した学生に対し、辞退したことが周りにどのような影響をおよぼしているのかについて充分説明する機会を持たなかった。しかし社会に出てから、一旦やろうと意思表示したことを途中でやめるのは、自分の信用に関わってくることを話して、辞退を受け付けるとよかったと考える。

#### (4) 実習先調整 (マッチング)

6月初旬に実習先の希望を聞くため、一人一人の学生に面談を実施した。面談の場で学生のインターンシップに臨む気持ちを聞くことができた。実習先の選定には交通費が学生持ちであるため、実習先が学生の自宅や下宿からあまり遠い場所にならないよう配慮した。面談の中で、次の事例のように将来の夢を語る学生もあった。

##### 〈事例 学生Yの場合〉

Yは研究室に来て筆者と向き合うと「先生、海が好きなんです」と素直な表情で語る。筆者は「そう、夏向きやね」と答え、「将来は海の近くでペンション経営が希望かな。でも、冬のことも考えとかないとあかんね」と会話を続けた。Yは結局カヌーやヨットなどマリンスポーツをスタッフとして指導するA海洋スポーツセンターを実習先に選んだ。学生はそれぞれ自分の夢を持っている。その夢をどのように実現していけばよいか、道筋のつけ方に戸惑っているように感じた。夢に近づくために、誰かにその夢を充分聞いてもらうことが将来を開いていく始まりではないかと思う。傍らに話す相手がいることが大切であろう。

#### (5) 辞退の相談

実習先が決まり、参加する学生を紹介するために実習先に前もって送っておく個人登録用紙を学内の学部事務室に提出する日である6月13日(金)の昼休みに、筆者の研究室へ駆け込んできた学生がいた。

##### 〈事例 学生Tの場合〉

心配顔のTに「どうしたの」と聞くと、「今日が個人登録用紙の締め切りなのにその個人登録用紙に捺印して来るのを忘れたために提出できないので、実習の参加を辞退したい」と言う。既に、実習先に受入れの許可をとり、参加人数も連絡済みの時期である。筆者は「実習に参加したいのだけれど、ハンコを押してくるのを忘れたので相談に乗って欲しいというのなら、わかるけど」と言うと、「最初からそんなに強くインターンシップに行きたいとは思っていませんでした」と答える。「今まで、そんな失敗したことないの」と聞くと、「ありません」という事である。そこで、仕事をしていると失敗なしでやっていたことはありえないという話をし、今度の実習でもまだ仕事もしたことがない学生は失敗することが当たり前だから、その失敗をどう乗り越えていけるかが大切ではないかと話し

た。そして、「その用紙はどこに提出するの」と聞くと、「学部事務室です」と言い、「ハンコを押すのを忘れてきたので、待ってもらえないか聞いてみます」と続けた。10分後に、まだすっきりしない顔で、「用紙の方、受け取って貰えました。ハンコのことは待って貰えました」と報告に来た。まじめな学生であるが、実習に出すのが少し心配になった。筆者にはTがインターンシップだけでなく、社会にでること自体に不安を感じていたのではないかと思われた。Tは今回の実習でフィットネス施設において幼児の水泳指導を体験し、相手が自分より小さい子供であったため何かしてあげなければという気持ちが働き一生懸命実習に励み、自信ができたようである。Tは実習後もその施設のアルバイトに誘われ、指導を続けているということであった。

インターンシップの実習参加に際して、途中辞退や辞退には至らなくても参加までに揺れ動いている学生の様子が伺える。就職活動で内定を勝ち取るには、やる気を試される面接が待ち受けているだろうし、仕事を始めてからでも、もっと厳しい場面に出会うであろう。学生時代にインターンシップに参加することで学生にとって何らかの成長ができればと考える。

実習先調整のための面談は、できるだけ学生の希望に沿った実習先を見つけるために学生と筆者が協働して行う作業であった。この面談で実習先について話す中で、学生自身が「実習に行くまでに先輩の実習ノートを見ておきたい」と言うように学生が自主的に実習に向けて準備する具体的な行動に結びつけることができた。筆者にはこの面談での対話が実習において責任を持って頑張ろうという気持ちを持つことに繋がったと感じられた。

#### (6) 実習先の評価

本学インターンシップに参加した18名の学生について、実習先から届いた総合評価を表-3に示した。

表-3 実習先評価

実習先による総合評価	人数
A (非常に良い)	9名
B <sup>o</sup>	1名
B (良い)	6名
C (普通)	1名
D (わるい)	1名
E (不可)	0名

評価は実習先により、厳しい実習先と甘い実習先があり、必ずしもそのままの評価がその学生の評価であるとは言えない部分がある。実習先から「インターンシップ評価報告書」にいただいた寸評では、A、B<sup>o</sup>の高い評価を得た学生には「意欲を持ち積極的に取り組む姿勢がみられた」という内容が多く見られた。また、B、C、Dの評価の学生には「自分の意思を伝える力が足りない」、「積極性に欠ける」、「言葉遣いが気になる」、「声が小さい」「元気が欲しい」などがあった。

### Ⅲ 学生支援のあり方

最近の若者は親や身近な人が働いている現場を見る機会が少ない。あるいは豊富な物に溢れた生活に慣れているため、自分で考え工夫し物事を達成することが少なくなり、常に受け身で待っている姿勢が身についてしまいがちで、自分から何かを掴み取ろうとする経験が不足していると感じられる。アルバイトで簡単にお金が儲けられると、就職して働くことの大切さに気がつきにくい。また現在社会で働いている大人たちに魅力を感じにくいことや若者の働き口が少ないことも若者の仕事離れに関係している。働く喜びや働くことが社会における自己実現に繋がることを感じにくく、働くことに意欲を見出しにくいのだろう。このような気質を持つ若者には仕事のおもしろさを体験させることが大切なかもしれない。しかし学生にとっては、学生時代と社会に出てからの生活にはギャップが大きく、どのように準備していけばよいかすら思いつかない状態であろう。学生を社会に送り出すためには、学生が将来について考えていることを話し出せるきっかけを作ることが必要である。今回の「インターンシップ」授業での実習先調整の面談がその役割を果たしたと思われる。「インターンシップ」授業を履修し、実習に参加した学生は社会参加することに興味を示した学生である。実習までに不安な気持ちを少しでも取り除き、積極的に実習に取り組もうとする学生のやる気を引き出すように関わるのがよいと思われる。ビジネスマナーや社会常識についての事前教育を充実させることも大切である。実習先で学生が良い評価を得ることは学生にとっても本学にとっても嬉しいことである。反対に実習先で迷惑をかける場合もある。本学が実習先と日頃から信頼ある関係を築いておく必要があるだろう。互いに協力して学生を見守り、社会に出すための教育ができるような環境を作っていきたい。学生には自分の未熟さを認め、失敗しながらも行動することの大切さを理解させ積極的にチャレンジさせたい。「インターンシップ」授業における学生支援には、学生が話したい時にはいつでも相談できる人が学生の身近にいて、学生の成長を信じて関わり続けることが大切である。

### Ⅳ おわりに

本学の「インターンシップ」授業は大学コンソーシアム京都インターンシップへの参加と本学のインターンシップ実習先への参加の2本立てである。多様な志向を持つ学生の希望を叶えるため、両方のインターンシップ参加を支援していくことが大切であると考え。今回、「インターンシップ」授業担当者として学生と関わり、学生は社会に出ることについてさまざまな不安を抱えていることがわかった。本学の学生の実態を踏まえ学生に社会参加を促すには、学生自らが社会における自己実現をしたいと思うようなれるきっかけを増やすことが必要であろう。教職員や家族、友人など学生を取り巻く人々が大学卒業後の将来に不安を持つ学生の気持ちを受け止め、学生自らが自分の力で歩いていけるように、学生の傍らにいて話し相手になることが大切であろう。学生を社会に送り出すための教育には、一人一人の学生の個性にあった接し方をすることが大切である。本学にとって、学生が積極的に卒業後の進路について考えることができるような環境を整えることが重要であると思われる。具体的には少人数の授業で学生が将来について考える機会を作る、社会



## 平成15年度「インターンシップ」授業における学生支援

で働いている身近な先輩の話聞かせるなど、学生自身が自分の将来像を描くことができるような内容がふさわしいと考えられる。「インターンシップ」授業は学生に社会参加を促すきっかけの一つになったといえるだろう。学生にとっても対人関係の訓練や責任感を育成する機会となり、社会との接点を自ら見出す体験になったと考えられる。

最後に平成15年度の「インターンシップ」授業と一緒に担当した世戸俊男教授、中村一彌教授、木曾利之教授、インターンシップの事務を一切引き受け授業を支えてくれた藤巻真由美女史に深く感謝の意を表す。

### 参考文献

- 大学コンソーシアム京都 2003インターンシップ実習生募集ガイド 2003年3月  
近畿経済産業局 インターンシップ：サクセスとリスク 調査研究報告書 2003年3月  
日本経済新聞 2003年11月19日  
福島直樹・尾形僚 監修 「就職！！インターンシップ」学生援護会 2000年4月1日初版  
里美実 「働くことと学ぶこと わたしの大学での授業」太郎次郎社 1995年9月20日初版